

## ■ 概況

7/21~7/27のNYMEX・WTI先物市場は、94.70~97.26ドルの範囲で推移した。

7月28日は、米国の第4半期のGDP成長率は前年同期比マイナス0.9%と市場予想を下回る2期連続のマイナスが発表されたことで、景気後退入り懸念から、反落した。9月限の終値は前日比0.84ドル安の96.42ドル。

週末29日は、OPECプラスが、8月3日からの閣僚会議で9月の現行生産方針維持が決まるとの観測が高まる中、6月の産油量が合意に300万b/d未達と伝わり、需給ひっ迫懸念から、反発した。欧米主要株式市場の好調も、値上がり要因となった。9月限の終値は前日比2.20ドル高の98.62ドル。

週明け8月1日は、この日発表の中国の7月の製造業購買者景況指数(PMI)が49.0と2か月ぶりの悪化、また、米国の7月の製造業PMIも52.8と2年1か月ぶりの低水準で、世界的な景気後退懸念が拡大し、大幅に反落し、中心限月ベースで、2月下旬以来5か月ぶりの安値となった。OPECプラス会合を前に、持ち高調整の売りも多かった模様。9月限の終値は前日比4.73ドル安の93.89ドル。

2日は、翌日のOPECプラス会合を控え、9月も現行生産方針維持との観測が強く、大幅な増産を期待できないとして、需給ひっ迫懸念から反発した。9月限の終値は前日比0.53ドル高の94.42ドル。

3日は、OPECプラスの閣僚会議が9月の増産幅を10万b/dと、予想通り、小幅な増産に止めたことで、市場に大きな影響はなかった。むしろ、米国の先週末時点の石油在庫が、原油、ガソリンともに予想外の積み増しとなったことで、需給緩和懸念から、大幅反落した。9月限の終値は前日比3.76ドル

安の90.66ドル。

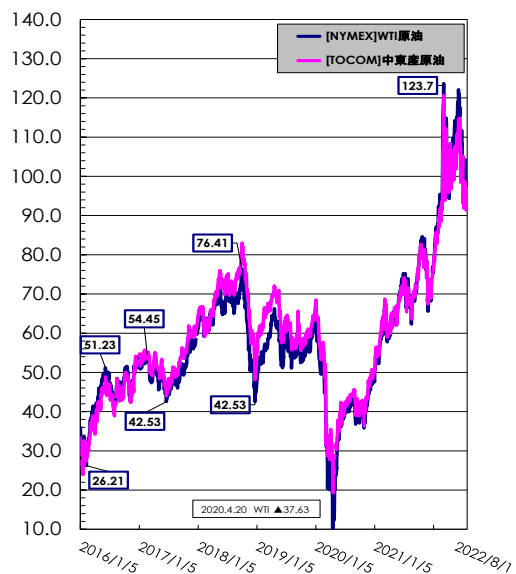
アジアの指標原油である中東産バイ原油/東京市場(9月渡し)は、7月21日~27日の間、101.00~105.20ドルの範囲で推移した。7月28日106.50ドル、29日106.40ドル、8月1日101.10ドル、2日98.60ドル、3日98.70ドルで推移した。

為替は、7月21日~27日の間、136.47~138.51円の範囲で推移した。7月28日136.30円、29日134.61円、8月1日132.91円、2日130.88円、3日133.74円で推移した。

そのような中で、8月1日時点の価格は、ガソリンが前週比0.5円の値下がり、軽油も同0.5円の値下がり、灯油は3円の値下がり(18%ベース)であった。ガソリンは5週連続の値下がり、軽油も5週連続の値下がり、灯油も5週連続の値下がりであった。ガソリンの全国平均価格は169.9円と、引き続き、燃料油価格激変緩和対策が発動され、次週の補助金の支給額は37.7円となった。

原油		今週	前週比	前年比
需給	原油処理量 (千kl)	7/24 ~ 7/30	3,021 ▲ 221	▲ -
	トッパー稼働率 (%)	"	78.5 ▲ 5.7	▲ -
	原油在庫量 (千kl)	7/30	9,938 ▲ 39	▼ -
価格	中東産原油(TOCOM) (\$/bbl)	8/1	97.00 ▲ 5.62	▲ 25.4
	WTI原油(NYMEX) (\$/bbl)	8/1	93.89 ▼ -2.81	▲ 22.6
	原油CIF単価 (\$/bbl)	7月上旬	117.07 ▼ -0.72	▲ 45.31
	①原油CIF単価 (¥/kl)	"	99,611 ▲ 616	▲ 49,709
	②ドル換算レート (¥/\$)	"	135.26 ▼ -1.65	▼ -24.70
	外国為替TTSレート (¥/\$)	8/1	133.91 ▲ 3.72	▼ -23.26

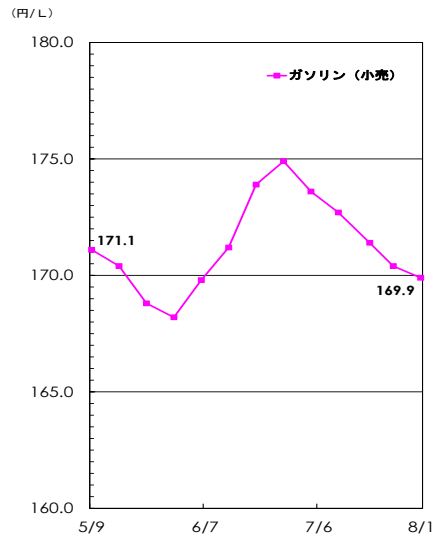
(\$/b)



(単位: 千kl、円/%)

ガソリン		今週	前週比	前年比
需給	生産	7/24 ~ 7/30	885 ▼ -79 ▲ -	
	輸入	"	n.a. n.a.	n.a.
	出荷	"	904 ▲ 18 ▼ -	
	輸出	"	1 ▼ -77 ▼ -	
	在庫	7/30	1,385 ▼ -20 ▼ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	7/26 ~ 8/1	79.3 ▲ 2.0 ▲ 12.2	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	7/26 ~ 8/1	80.0 ▲ 0.7 ▲ 11.1
		(TOCOM/中部)	8/1	77.0 ➡ 0.0 ▲ 11.7
	小売 [週動向] (資工庁公表)	8/1	169.9 ▼ -0.5 ▲ 11.7	

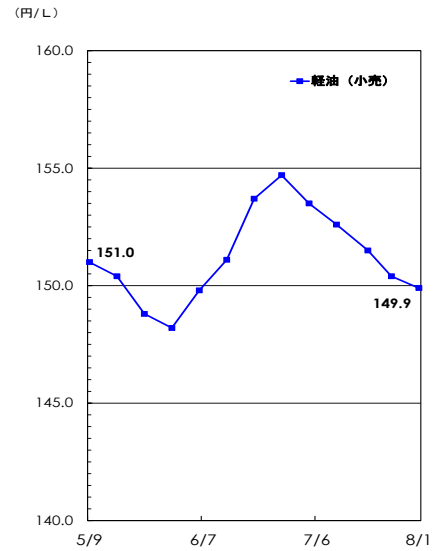
※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

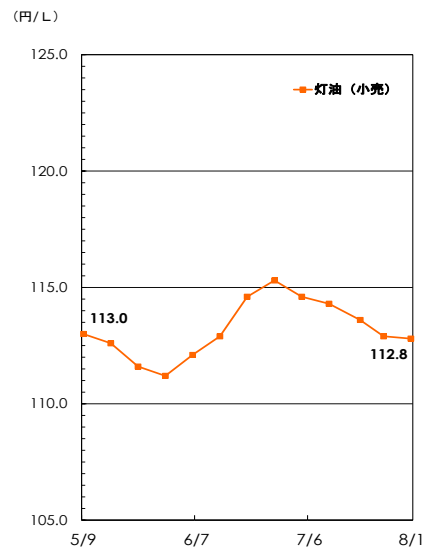
軽油		今週	前週比	前年比
需給	生産	7/24 ~ 7/30	813 ▲ 130 ▲ -	
	輸入	"	n.a. n.a.	n.a.
	出荷	"	660 ▲ 95 ▼ -	
	輸出	"	181 ▲ 62 ▲ -	
	在庫	7/30	1,387 ▼ -28 ▼ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	7/26 ~ 8/1	76.2 ▲ 1.3 ▲ 8.1	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	7/26 ~ 8/1	80.7 ▲ 1.4 ▲ 12.0
		(TOCOM/中部)	8/1	- - -
	小売 [週動向] (資工庁公表)	8/1	149.9 ▼ -0.5 ▲ 11.7	

※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

灯油		今週	前週比	前年比
需給	生産	7/24 ~ 7/30	80 ▼ -90 ▼ -	
	輸入	"	n.a. n.a.	n.a.
	出荷	"	35 ▼ -3 ▼ -	
	輸出	"	0 ▼ -25 ▲ -	
	在庫	7/30	1,571 ▲ 45 ▼ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	7/26 ~ 8/1	76.2 ▲ 1.2 ▲ 8.3	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	7/26 ~ 8/1	82.0 ▲ 0.8 ▲ 20.0
		(TOCOM/中部)	8/1	74.5 ➡ 0.0 ▲ 9.7
	小売 [週動向] (資工庁公表)	8/1	112.8 ▼ -0.1 ▲ 15.2	



■ 関連情報

1 海外/原油

今週の石油先物市場は、引き続き、ロシアの対欧天然ガス供給削減の石油への波及懸念を中心とする値上がり要因と金利引き上げによる景気後退懸念・需要減少懸念という値下がり要因を中心として、日替わりで目まぐるしく上下する毎日が続いたが、WTI先物の終値は28日の96.42ドルから3日の90.66ドルと推移した。

8月3日発表の29日時点の米国エネルギー情報局(EIA)の米国国内週間在庫情報は、原油在庫が前週比450万バレル増と市場予想(前週比60万バレル減)に反する積み増し、さらに、夏のドライブシーズンであるにも関わらず、ガソリン在庫も予想に反する同20万バレルの積み増しで、米国需要の先行きを懸念させる内容だった。

EIAによると、ガソリンの小売価格は、8月1日時点で前週比1.38セント値下がりの1ガロン4.192ドル(148.1円/ℓ)と7週連続の値下がりであった。ディーゼル小売価格は、前週比1.30セント値下がりの1ガロン5.138ドル(181.5円/ℓ)と6週連続の値下がりであった。

ベーカーヒューズ社によると、7月29日時点の米国内稼働石油掘削装置は前週比6基増の605基と2週ぶりの増加となった。

2 国内/製品需給 (1) 出荷

石連週報によれば、2022年7月24日~7月30日に休止したトッパー能力は36.7万バレル/日で、前週に対して33.9万バレル/日減少した(全処理能力は345.8万バレル/日)。

原油処理量は302.1万klと、前週に比べ22.1万kl増加。前年に対しては27.6万klの増加。トッパー稼働率は78.5%と前週に対して5.7ポイントの増加、前年に対しては7.2ポイントの増加となった。

生産は前週に比べてジェット、軽油、A重油が増産、その他の油種で減産となった。ガソリン/8.2%減、ジェット/66.4%増、灯油/53.0%減、軽油/19.1%増、A重油/2.1%増、C重油/27.0%減。今週のC重油の輸入は0.0万kl(前週比0.5万kl減)。軽油の輸出は18.1万kl(前週比6.2万kl増)。

出荷(輸入分を除く)は前週比でジェット、灯油が減少、その他の油種で増加した。前年比ではA重油で増加し、その他の油種で減少した。ガソリンの出荷は90.4万kl(対前週2.0%増)と2週連続で増加した。ジェット7.1万kl(対前週17.1%減)、灯油3.5万kl(対前週9.3%減)、軽油66.0万kl(対前週

16.9%増)、A重油17.4万kl(対前週10.1%増)、C重油20.4万kl(対前週34.4%増)。

(単位:千kl)

	今週 (7/24 ~ 7/30)	前週 (7/17 ~ 7/23)	前週比	
ガソリン	904	886	▲ 18	(2%)
ジェット燃料	71	86	▼ -15	(-17%)
灯油	35	38	▼ -3	(-8%)
軽油	660	565	▲ 95	(17%)
A重油	174	158	▲ 16	(10%)
C重油	204	152	▲ 52	(34%)
合計	2,048	1,885	▲ 163	(9%)

※今週出荷量=(前週末在庫+今週生産+今週輸入) - (今週輸出+今週末在庫)

2 国内/製品需給 (2) 在庫

7月30日時点の在庫はジェット、灯油が積み増しとなり、その他の油種で取り崩しとなった。前年に対してはジェットが増加し、その他の油種で減少となった。

ガソリンは138.5万kl、前週差2.0万kl減。前年に対しては21.0万kl少ない。

灯油は157.1万kl、前週差4.5万kl増。前年に対しては43.0万kl少ない。

軽油は138.7万kl、前週差2.8万kl減。前年に対しては10.9万kl少ない。

A重油は64.0万kl、前週差1.6万kl減。前年に対しては7.4万kl少ない。

C重油は156.9万kl、前週差4.9万kl減。前年に対しては31.9万kl少ない。

(単位:千kl)

	今週 (7/30)	前週 (7/23)	前週比	
ガソリン	1,385	1,405	▼ -20	(-1%)
ジェット燃料	881	780	▲ 101	(13%)
灯油	1,571	1,526	▲ 45	(3%)
軽油	1,387	1,415	▼ -28	(-2%)
A重油	640	656	▼ -16	(-2%)
C重油	1,569	1,618	▼ -49	(-3%)
合計	7,433	7,400	▲ 33	(0.4%)

### 3 国内/製品卸売価格 (1) 元売会社 仕切価格改定動向

7月26日～8月1日の指標原油価格は前週比で値上がりし、為替レートは円高の進行があったものの、7月の中東原油調整金の値上がりもあり、元売会社の原油コストは、1.5円値上がりしたものと見られる。

上記コストアップに先週の補助金額39.0円を加えたコスト上昇額40.5円に、補助金37.7円(計算上40.4円になるが、35

円を超える値上がり分は半額補助)が支給されることから、次週(8/4～8/10)の元売会社の実質的な卸売価格は2.8円の値上げとなった模様。

### 3 国内/製品卸売価格 (2) 業転価格・先物価格動向

7月26日～8月1日の製品スポット市況は、7月19日～25日平均と比べ、海上・灯油の横ばいを除く、すべての取引・油種で値上がりした。

直近週(7/26～8/1)の陸上スポット価格平均値は、前週(7/19～7/25)比で、ガソリンは2.0円の値上がり、灯油は1.2円の値上がり、軽油は1.3円の値上がりだった。

東京湾渡しの海上スポット平均価格は、直近週(7/26～8/1)に、前週(7/19～7/25)比で、ガソリンは0.8円の値上がり、灯油は横ばい、軽油は2.4円の値上がりだった。

先物価格の平均は、前週比で、ガソリンは0.7円の値上がり、灯油は0.8円の値上がり、軽油は1.4円の値上がりだった。

(RIM) (単位: 円/%)

[陸上ローリー 4地区平均]	今週 (7/26～8/1)	前週 (7/19～7/25)	前週比
	レギュラー	79.3	77.3
灯油	76.2	75.0	▲ 1.2
軽油	76.2	74.9	▲ 1.3

(TOCOM) (単位: 円/%)

[期近物/終値 [平均]]	今週 (7/26～8/1)	前週 (7/19～7/25)	前週比
	レギュラー	80.0	79.3
灯油	82.0	81.2	▲ 0.8
軽油	80.7	79.3	▲ 1.4

※上記価格は税抜き価格

参考値 (7/26～8/1実績値) (単位: 円/%)

油種	現物	先物	平均
ガソリン	▲ 2.0	▲ 0.7	▲ 1.4
灯油	▲ 1.2	▲ 0.8	▲ 1.0
軽油	▲ 1.3	▲ 1.4	▲ 1.4
A重油	▲ 0.8		

(出所) 現物: RIM社陸上ローリー4地区平均価格

(千葉・川崎・中京・阪神)

先物: TOCOM京浜地区海上バージ渡し平均価格

### 4 国内/製品小売価格

8月1日時点のSS店頭価格は、ガソリンが前週比0.5円安の169.9円、軽油も同0.5円安の149.9円、灯油は18%ベースで同3円安の2,030円(1%ベースでは同0.1円安の112.8円)。ガソリンは5週連続の値下がり、軽油も5週連続の値下がり、灯油も5週連続の値下がりだった。

ガソリンについて、都道府県別には、値上がりは6県、横ばいは4県、値下がり37都道府県だった。全国最安値は宮城県の162.9円、その次は埼玉県の163.0円であった。他方、最高値は長崎県の182.6円だった。最も値上がりしたのは佐賀県(前週比1.5円高)、横ばいは長野県、静岡県、石川県、島

根県、最も値下がりしたのは宮城県と栃木県(ともに同1.5円安)だった。

次回調査時(8/8)のガソリンの小売価格は、値上がりが見込まれる。

(資工庁公表) (単位: 円/%)

[週動向]	今週 (8/1)	前週 (7/25)	前週比	直近高値
	レギュラー	169.9	170.4	▼ -0.5
灯油	112.8	112.9	▼ -0.1	08/8/11 132.1
軽油	149.9	150.4	▼ -0.5	08/8/4 167.4

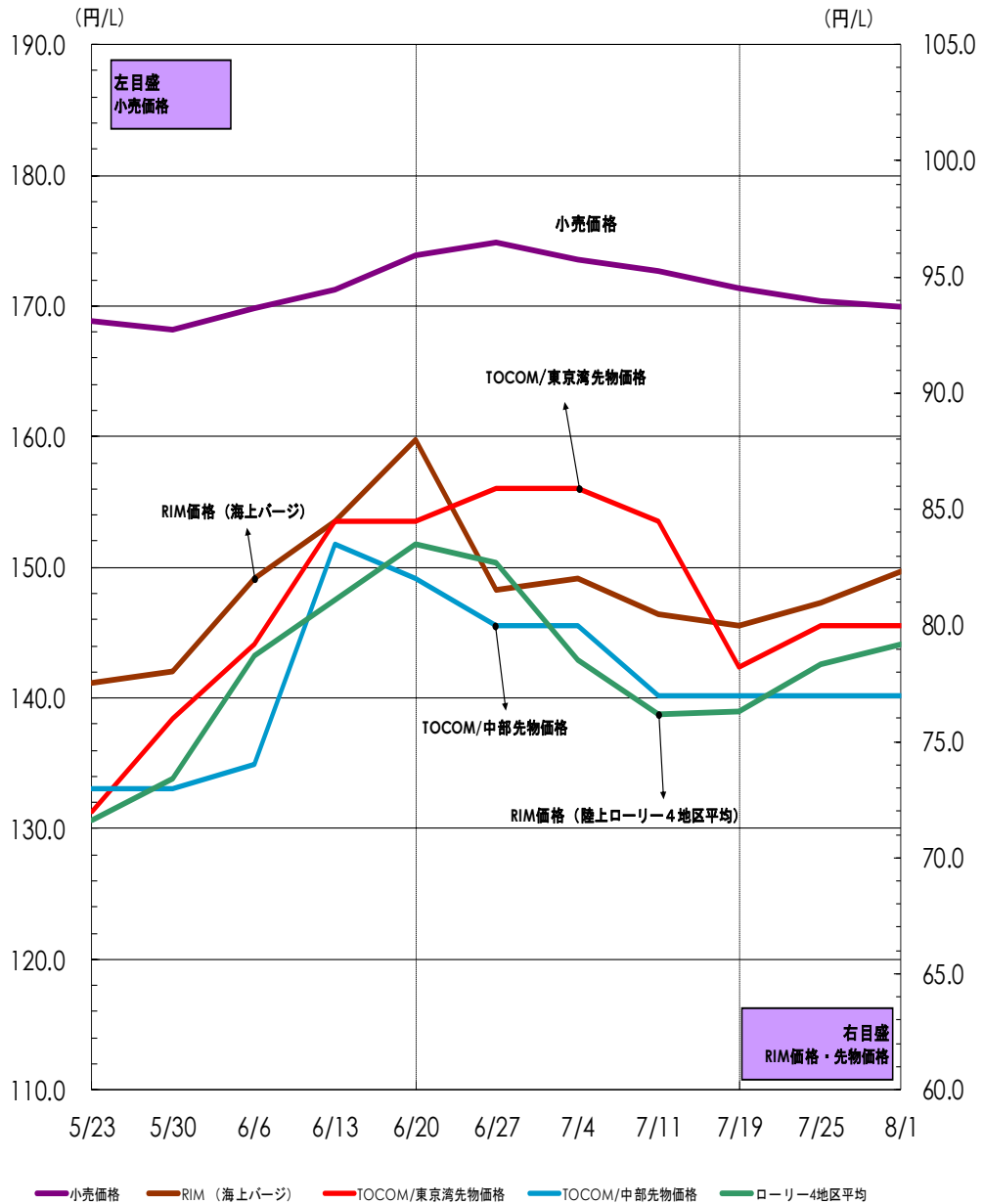
※ 現金一般価格の全国平均値 (消費税込み)

07年4月以降 2,000店舗を対象。

直近高値とは2003年10月以降の最高値。

# ガソリン価格推移

(2022/5/23 ~ 2022/8/1)



(注)①「小売価格」は消費税込みの価格 RIM価格・TOCOM先物価格は税抜き価格  
 ②RIM価格(陸上ローリー)は4地区平均価格

## ■ お知らせ

本レポートは当センターのホームページ (<https://oil-info.ieej.or.jp>) にも掲載しています。  
次回(2022第19号)の公表は、8/12(金)14:00です。

### 本レポートのご利用について

本レポートについて、テキスト、グラフィックス及びその他の情報(以下、併せて「ドキュメント」)に関わるすべての知的所有権は、一般財団法人日本エネルギー経済研究所石油情報センター(以下、当センター)又は当センターヘドキュメントを提供している第三者へ独占的に帰属します。

当センターの事前の書面による承諾を得ることなく、ドキュメントを転用、複製、改変等の一切を固く禁じています。

また、ドキュメント内容に関しては万全を期していますが、その内容の正確性および安全性を保証するものではありません。

### 「ウィークリー オイル マーケット レビュー」とは

平成16年5月に経済産業省資源エネルギー庁資源・燃料部石油流通課 主催の「石油製品市場動向研究会」が取りまとめた中間報告で、「わが国石油産業における市場機能、価格発見機能が更に強固なものとなることが望まれるとともに、中期的な課題として、石油産業において確立していく市場機能、価格発見機能に基づく合理的な価格認識及びそれを踏まえた自己責任の下での経営判断の必要性について、石油産業関係者の認識が更に深まることにより、わが国の基幹産業である石油産業全体としての合理性、活力が一層高まることを期待したい。」と提案されています。

当センターでは、これを受けて石油連盟、全国石油商業組合連合会をはじめ関係機関等の協力を得て、石油関係者、企業の経営者層(特に給油所経営に携わる方々)から一般消費者の方々に対し、原油・石油製品需給や価格動向を的確に理解するツールの一つとして、「ウィークリーオイルマーケットレビュー」を平成17年5月より定期的に発信しています。

### 本レポート掲載データの出所について

#### ①【原油・石油製品需給】〈石連週報〉

石油連盟(石連)「原油・石油製品供給統計」週報データを千KL単位に換算して採用。

「出荷」は当センターの推計。

#### ②【原油・先物価格】〈WTI原油、中東産原油〉

WTI原油は、ニューヨーク商業取引所(New York Mercantile Exchange : NYMEX) WTI原油先物の期近物・終値を採用。

中東産原油は、東京商品取引所(The Tokyo Commodity Exchange : TOCOM) 中東産原油の期近物・終値を採用。 ※「二番限(翌月限)」

中東産原油は、ドバイ原油及びオマーン原油の平均価格を指標としている。為替換算レートとして、三菱東京UFJ銀行発表TTM(Telegraphic Transfer Middle rate : 中値)を採用。

原油CIF単価は、財務省貿易統計「原油・粗油平均CIF単価」(旬間値)を基に、石油連盟が試算したドル表示の参考値を採用。

#### ③【国内製品・元売仕切価格】

元売仕切価格は、元売会社(一次卸)と系列特約店など(二次卸)との間で売買される卸価格。

元売会社は、平成22年4月以降、現行の新価格体系を見直し、原油や製品相場、他社仕切りなどの動向を総合的に判断し、具体的方針を決める方式に変更。さらに平成26年6月以降、原油コストをより重視する方式に変更している。

#### ④【国内製品・業転価格】〈RIM業転〉

国内陸上ローリー価格は、リム情報開発株式会社(RIM)「LORRY RACK・レポート」の千葉、川崎、中京、阪神の4地区の平均値を採用(いわゆる4RIM価格とは異なる)。

#### ⑤【国内製品・先物価格】〈TOCOM〉

TOCOM 東京湾及び中部石油製品期近物・終値を採用。

TOCOM東京湾は京浜地区海上バージ渡し価格(平均値)、TOCOM中部は中部地区陸上ローリー渡し価格(平均値)。

#### ⑥【国内製品・小売価格】〈週動向調査〉

約2,000SSを対象に週次ベースのSS店頭における店頭現金価格の全国平均値を採用(資工庁公表)。原則として、毎週(月)時点の価格を調査し(水)14:00に公表(資源エネルギー庁HPに掲載)。